データ利活用のための データマネジメント技法の研究(クラス 1) －最初に取り組むべき 5 つの知識領域－

アブストラクト

1. 研究の背景と目的

多くの企業においてデータ利活用への取り組みを行っている昨今、データそのものの価値も高まっている。しかしながら、データ利活用に不可欠なデータマネジメントへの知識領域への理解の不足により、データ利活用が進んでいない。データマネジメントに関する書籍は多く出版されており DAMA International のデータマネジメント知識体系ガイド（DMBOK）[1]では、データマネジメントの各機能が網羅的に解説されている。データマネジメントは組織・体制・ルール、システムの機能・アーキテクチャ、データモデリングなど必要なアクティビティは膨大であり、DMBOK が示すようにボリュームが多く単純ではない。このように、データマネジメントは一般的に必要性が認知されている一方で、十分な取り組みができていると言える企業は多くない。本分科会の参加企業でも、データマネジメントの取り組みは不十分な状況であり、どのような観点で何をどの程度整備していくのか明確なビジョンを持てている企業は少ない。

本研究では、データ利活用に取り組む際に直面する課題に対しデータマネジメントをどのように適用していくべきかをテーマとし、今後データマネジメントに取り組む企業、強化を図る企業への手助けとなるべく、データマネジメントに取り組む際のシナリオを検討した。

2. 仮説

DMBOK の 11 の知識領域は相互に関係しあって強化していくものだが、幾つかの重要な知識領域が存在し、その知識領域にフォーカスして取り組みを開始する、または強化・改善を行っていくことが、データ利活用を効率的、かつ効果的に進められるものと仮定した。重要な DMBOK 知識領域を抽出するため、まず、各社が抱えている課題を挙げ、DMBOK の 11 の知識領域との関連性を星取表で整理した。集計して多かった「組織体制」、「データモデリング」、「データ統合と相互運用性」、「メタデータ」、「データ品質」の 5 つを最初に取り組むべき重要な知識領域と仮説を立てた。

3. 検証方法

本仮説の性質上、実験的な検証は数年単位で時間が必要となるため、本研究分科会の参加企業各社が抱える課題に対して、机上でのシナリオ検証（内部検証）と本分科会以外の人によりシナリオ検証の妥当性評価（外部検証）を実施することで仮説の妥当性を確認した。内部検証については、各課題の原因を考察して、それを解決するためのあるべき姿を定めた。そして、あるべき姿を実現するために必要なアクティビティとその実施順序を「シナリオ」として整理した。これらのシナリオの内容が、仮説で示した 5 つの知識領域に関係するものであることが明らかであれば、5 つの知識領域に取り組むことでデータ利活用における課題解決に効果があると評価することとした。また、客観性を持たせるため実施した外部検証では、内部検証結果（検証シナリオ）とともに 5 つの知識領域を纏めた概説および、各組織の対応状況を測るためのチェックリストを提供し、アンケート形式で回答を得た。

4. 結論

内部検証の結果、各課題を解決するためのアクティビティが、最初に取り組むべき 5 つの知識領域に含まれることが確認できた。外部検証の結果では、検証シナリオに対して過半数は「違和感はない」、チェックリストについて 7 割が「役に立った」と回答しており、各社を取り巻く環境が異なる中でも、一定割合以上の企業でデータマネジメントに取り組む際に参考になったと判断できる。

一方、「課題の原因がすべて挙げられていない」、「原因からあるべき姿への結び付けに唐突感がある」などの意見もあった。本検証シナリオやチェックリストには各社の個別な事情やあるべき姿（データ利活用のレベル）は反映されていない。実際にデータ利活用を進める上では、各社で課題の原因、あるべき姿、アクティビティを話し合い、テーラリングしてご利用いただきたい。